

基調講演 3

日本神話にみる基層心意：“出雲”の姿相・位相を踏まえて

千家和比古

日本神話は古代日本人の心を反映している。本発表では神話編纂時の人々の心がどのようなものだったのかを論じる。

数詞では母音変化で倍数になっている。八が聖数なのは、完成、絶対性、終了などを象徴する数である十の前にある最大の倍数だからだろう。それは未完成の段階と相対性、無限を象徴すると思われる。古代日本の基層心意は未完成、相対性を無限に通じると考えていたらしい。

神話でも天つ神と国つ神とは対立せず、和合して一体化している。天つ神と国つ神の婚姻の神話は多い。両者は補完的關係にあると考えられたのだろう。出雲と大和、そして出雲国造と天皇の關係も同じであろう。

記紀神話は中国の影響下に法治国家として律令体制を整えようとしていた天武・持統朝に編纂された。律令にならってピラミッド化された神々の体系制度化が図られた。しかし本来的、基層的な神々の体系は天つ神と国つ神がそれぞれ同心円状に配置されるものであったはずだ。つまり天つ神は伊勢神宮の天照大神を中心とし、国つ神は出雲大社の大国主神を中心とする構造である。そして両者をつなぐのが高天原から地上、根の国に移動する須佐之男命である。

瓊瓊杵尊が磐長姫を娶らず、木花開耶姫のみを娶る日向神話は、通常、バナナ型死の起源神話と分類されるが、これも永遠性を採らず、木、花の有限性を重視したといえよう。また、この神話は、神社が木造であり、それを造り替えていくことによって生命を永遠に更新させていることを想起させる。出雲では、国造の代替わりの際に火をもって靈威を継承し、日々の儀礼でその靈威を更新させている。有限であるものを、更新し続けることによって永遠性を志向しているのだろう。

日本神話には、このように相対性、永遠性に通じる有限性を重んじる心意が反映しているのである。